

インドの「ハンディクラフト」

金谷 美和

民博 外来研究員

インドでは独立後、手工芸開発が重視され、今では職人たちを讃えるナショナル・アワードという報奨制度も作られた。国家レベルで評価することで文化的価値、美的価値を守り、ひとつの大きな産業として発展させていく。

ロップメント、つまり手工芸開発につながる施策となった。対象になっているのは専門の職人が作る金工、宝飾品、木工、絵画、染織、編組、土器・陶器、玩具のほか、女性の手仕事である刺繍やアブリケも含まれる。

文化ではなく、経済

行政のみならず、農村開発に関心をもつNGOもハンディクラフトの生産者の支援をおこなったり、あるいはハンディクラフトを媒体とした開発に携わったりするようになった。ハンディクラフトが開発にかかわる？と不思議に思う人もいるかもしれない。インドでは、ハンディクラフトは経済の問題としてとられてきたのである。

ハンディクラフト行政の初代の責任者であったチャットパディヤイは、「ハンディ



2011年度ナショナル・アワードを両面木板捺染アジュラクのサリーで受賞したアーダム・J・カトリー氏の授賞式の様子。写真提供・アーダム・J・カトリー

「ハンディクラフト」は行政用語
日本語の「手芸」を英語に訳すと、「ハンディクラフト」だという。では、このことばは、他の国ではどのような意味をもって使われているのだろうか。インドでは、英語のハンディクラフトということばは、手仕事によって作られたものを指す用語として使われている。英語なのは、行政用語として使われていることばだからだ。インドは多言語国家であり、中央行政における使用言語は英語とヒンディー語と定められている。ちなみにハンディクラフトのヒンディー語はハスタシルプという。
インドのハンディクラフト行政は、一九五二年にはじまる。一九四七年に英国の植民地支配から独立した後、農村経済の発展のために小規模産業の重点化がうたわれたが、これが後のハンディクラフト・ディベ

クラフトにかかわる問題にとりくむためには、ハンディクラフトを文化ではなく、経済の問題として考えなければなりません」と述べている。

経済学者によると、ハンディクラフトの生産者はインド全国におよそ八四〇万人（一九九四―九五五年）いると推計されており、インドの輸出品に占めるハンディクラフトの割合は少なくなく、経済的に重要であるという。

しかし経済的価値に重きをおいているからといって、ハンディクラフトのもつ文化的価値や美的価値が軽視されているわけでは決していない。ハンディクラフトの生産を担っている職人たちが、その仕事で食べていくことができなければ、その産業は先細りになり、職人が担っていた在来技法に関する知識や、職人がもっていた伝統的デザインといった膨大な文化資源が失われることになってしまう。職人たちが生業として持続的にハンディクラフトに携われるようにすることが、結果的には文化を守ることにつながるのである。

変化する職人

行政がおこなっている施策のうち、代表的なものにナショナル・アワードという報奨制度がある。毎年、二〇人のハンディク



展示即売会にて販売中の生産者。2016年首都デリーで開催されたイベントにて

ラフトの生産者が表彰される。授賞式は首都デリーで執りおこなわれ、記念品の楯が、大統領により手ずから贈られる。このことは、職人にとっては大きな名誉である。インドのハンディクラフトは、もともとは生活や儀礼に用いられる実用品であり、その生産には職人カーストが携わってきた。カースト制度のなかで社会的にも経済的にも低位に位置付けられてきた職人カーストや、周縁化されてきた女性の生産者が脚光を浴び、国家レベルで評価をうけることは、彼ら自身の仕事に自尊心を感じさせる機会となり、生業を継続させる動機となっている。
展示即売会も、行政が重視している施策のひとつである。職人が都市で開催されるイベント会場にでむき、客にハンディクラフト商品を直接販売するのである。ときには制作工程を客に見せたり、説明したりすることもおこなう。職人が自ら市場とつな



首都デリーの国立手工芸博物館において、展示即売会をおこなっている女性の陶工。客の前で、ろくろを回しながら制作工程を見せている。2014年撮影

がり、客の好みを反映した商品とはどういうものかを学ぶための場と位置付けられている。インドにおいても、ハンディクラフトが地域社会のなかで日常生活を支える衣食住の道具として作られ、使われていたようないかなるかはすでに失われつつある。職人は、国内市場や、さらにはグローバル市場に対応したハンディクラフト生産に転換することを求められているのである。